

Title	JFL環境における韓国人日本語学習者の言語活動に関する調査
Sub Title	
Author	中村, 愛(Nakamura, Ai)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2015
Jtitle	日本語と日本語教育 No.43 (2015. 3) ,p.53- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20150300-0053">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20150300-0053</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# JFL 環境における韓国人日本語学習者の 言語活動に関する調査

中 村 愛

## 1. はじめに

外国語学習者にとって学習環境が習得にもたらす影響は大きく、これまで盛んに研究が行われている。日本国内で日本語を学ぶ JSL (Japanese as a Second Language) 環境の学習者と、海外で日本語を学ぶ JFL (Japanese as a Foreign Language) 環境の学習者とは、日本語に触れる機会に大きな差があるが、それは単に日本語を使用する頻度だけでなく、日本語を使用する場面や状況など、言語活動の性質や内容についても異なるものと思われる。言語活動が第二言語の習得に与える影響は非常に大きく、習得の過程において言語活動を行うことの重要性や必要性については山内 (2003) で指摘されており、言語能力を高めるためには実際に言語活動を行うことが重要である。JFL 環境では、JSL 環境に比べ、学習者が日本語に触れる機会が少なく、日本語による言語活動の内容も限られてしまうが、来嶋・柴原・八田 (2012) は海外拠点の日本語教育に向け、言語活動と言語能力に着目した教材開発を行っている。

本稿では、JFL 環境の日本語教育において必要とされる支援とは何か、という問題意識から、JFL 環境で学ぶ日本語学習者がどのような場面や状況で日本語を使用し、どのような文法項目や語彙を必要としているか、といった学習者の言語活動に着目し、実際に学習者が行っている日本語による言語活動について調査した。調査は、韓国の新羅大学において初級日本語クラスを履修している日本語学習者を対象とし、大学内で学習者が日本語で行う言語活動を調査し、リスト化した。本稿ではその調査結果を報告する。

## 2. 調査対象と方法

### 2-1 調査対象

本調査では、韓国の新羅大学において教養課程の初級クラス<sup>1)</sup>を履修していた学生を対象とした。一クラスあたりの学生の人数は最大25名で、授業は、韓国人教師が韓国語で文法説明を行い、日本人教師が直説法で会話練習を行うチームティーチングのクラスであった<sup>2)</sup>。

### 2-2 調査方法

学習者の日本語による言語活動を調査するにあたり、今回は、授業時間外で、学習者が日本人教師と実際に行った言語活動をリスト化し、言語活動の目的によって7つのタイプ(「依頼」、「勧誘」、「質問」、「謝罪」、「相談」、「連絡」、「その他」)に分類した。

## 3. 調査結果

### 3-1 言語活動と言語活動のタイプ

学習者が日本人教師に対して行う言語活動を調査した結果、言語活動が行われる場面は「大学内」、「電話」、「メール」に分けられた。それぞれの場面における具体的な言語活動の内容と言語活動のタイプについて、調査結果を表1から表3に示す。

#### 3-1-1 大学内における言語活動

教室、研究室、食堂、廊下等、大学構内における言語活動について表1に示す。

表1 大学内における言語活動と言語活動のタイプ

内 容	言語活動の タイプ
1 欠席、遅刻、早退することを伝え、詫げる	連絡／謝罪
2 宿題や課題の内容、提出期限について質問する	質問
3 宿題や課題の提出が遅れることを伝え、詫げる	連絡／謝罪
4 授業で聞き漏らしたことについて質問する	質問

5	個別試験(会話試験)の日程変更を依頼する	依頼
6	成績について問い合わせる	質問
7	自宅学習の方法について相談する(アドバイスを求める)	相談
8	履修登録について質問する	質問
9	学校行事等の理由で授業を欠席する場合、担当教師に書類のサインを依頼する	依頼
10	就職が決まったことを報告する	連絡
11	廊下や食堂で挨拶をする	その他
12	廊下や食堂で身近な話題について話す	その他
13	留学について相談する	相談
14	旅行について相談する	相談
15	日本文化に関して質問する	質問
16	釜山の観光情報や生活情報を伝える	その他
17	学生のイベント(学園祭等)に招待する	勧誘
18	ほかの教師の居場所を尋ねる	質問
19	ほかの教師への伝言を依頼する	依頼
20	日本語で書いた手紙やメールの添削を依頼する	依頼

大学内における言語活動の内容のうち、1から10は、授業の出欠の連絡や履修登録、宿題、成績に関する質問など、授業に関係がある事柄であった。10の「就職が決まったことを報告する」は、大学の規則により、就職内定者に限り、研修で授業を欠席する場合、出席扱いとなるため、単なる報告ではなく、担当教師にそうした事情を伝える意図がある。そのため、この言語活動も授業に関係した内容である。11から20は挨拶や個人的な質問や相談であり、内容については、授業に関する話題と、個人的な話題の割合は50%ずつであった。言語活動のタイプは、「質問」が最も多く(25%)、最も少なかったのは「勧誘」(5%)であった。

### 3-1-2 電話における言語活動

電話における言語活動について表2に示す。

表2 電話における言語活動と言語活動のタイプ

内 容	言語活動の タイプ
1 欠席、遅刻、早退することを伝え、詫げる	連絡/謝罪

2	宿題や課題の内容、提出期限について質問する	質問
3	宿題や課題の提出が遅れることを伝え、詫げる	連絡／謝罪
4	授業で聞き漏らしたことについて質問する	質問
5	個別試験（会話試験）の日程変更を依頼する	依頼
6	成績について問い合わせる	質問
7	就職が決まったことを報告する	連絡
8	学生のイベント（学園祭等）に招待する	勧誘
9	教師の研究室を訪ねる際、事前に日時について質問する	質問／依頼
10	友人の欠席や遅刻等に関して伝える	連絡
11	教師からの電話連絡に対応する	その他

電話における言語活動の内容は、全て授業に関するものであった。出欠席の連絡をはじめ、大学内における言語活動の内容と重なるものが多いが、電話の場合、授業当日の欠席連絡など、より緊急性の高い内容が多かった。言語活動のタイプは、「連絡」と「質問」が最も多かったが（36%）、「相談」は0%であった。初級の学習者にとって電話における言語活動は難易度が高いため、「相談」のように状況説明などが必要となる複雑なタイプの言語活動は避けられたのではないかと考えられる。

### 3-1-3 メールにおける言語活動

メールにおける言語活動について表3に示す。

表3 メールにおける言語活動と言語活動のタイプ

	内容	言語活動のタイプ
1	欠席、遅刻、早退することを伝え、詫げる	連絡／謝罪
2	宿題や課題の内容、提出期限について質問する	質問
3	宿題や課題の提出が遅れることを伝え、詫げる	連絡／謝罪
4	授業で聞き漏らしたことについて質問する	質問
5	成績について問い合わせる	質問
6	学生のイベント（学園祭等）に招待する	勧誘
7	就職が決まったことを報告する	連絡
8	教師の研究室を訪ねる際、事前に日時について質問する	質問／依頼
9	友人の欠席や遅刻等に関して伝える	連絡
10	日本語の練習のために（日本語で）メールを送る	その他

メールにおける言語活動の内容は、6、8、10以外、70%が授業に関するものであった。10の「日本語の練習のために（日本語で）メールを送る」とは、日本語の練習を目的に学生から自主的に教師に宛て近況報告や日記のような内容のメールを送るといった言語活動である。言語活動のタイプは、電話と同様に「連絡」と「質問」が最も多く、40%を占めていた。また、「相談」が0%であった点についても電話の結果と共通しており、おそらく同じ理由によるものと思われる。

### 3-2 言語活動のタイプと割合

表1から表3で示した言語活動において、言語活動のタイプ別に、その割合を調査した結果を表4に示す。

表4 言語活動のタイプ別割合

言語活動のタイプ	頻度	割合 (%)
質問	13	31.7
連絡	11	26.8
依頼	7	17
謝罪	6	14.6
その他	5	12.1
勧誘	3	7.3
相談	3	7.3

言語活動のタイプ別の割合は「質問」が最も高く、「勧誘」、「相談」が最も低かった。「質問」については、「教師の研究室を訪ねる際、事前に日時について質問する」という言語活動において「依頼」と共に行われるため、「質問」と「依頼」を合わせた割合は、約半数（48.7%）を占める。また、「質問」に次いで割合が高い「連絡」のうち、全ての場面に共通する言語活動として、「欠席、遅刻、早退することを伝え、詫げる」、「宿題や課題の提出が遅れることを伝え、詫げる」があった。この言語活動は「質問」とともに「謝罪」も行われるため、「連絡」と「謝罪」が占める割合について見ると、41.4%と高い割合を占めている。

#### 4. おわりに

本稿では、JFL 環境における日本語学習者の言語活動の調査として、学習者が授業時間外で日本人教師と実際に行った言語活動のリスト化を行った。その結果、言語活動は大学内、電話、メールの場面において 24 種類の異なる内容が確認されたが、内容の大半は授業に関するものであった。これは学習者が教師に対して行った言語活動であるため、当然の結果であると言える。場面別に見た場合、大学内における言語活動の内容は、授業には関係のない内容の言語活動が半数を占めている点で、電話やメールとは異なっていた。また、「就職が決まったことを報告する」、「学校行事等の理由で授業を欠席する場合、担当教師に書類のサインを依頼する」など新羅大学の学生特有の言語活動も見られ、言語行動の内容は環境に関係なく行われ得る言語活動と、その環境特有の言語活動が見られた。また、言語活動のタイプ別に分類を行った結果、「質問」が最も高い割合を占めており、「勧誘」、「相談」の割合が最も低かった。また、「連絡」と「謝罪」の言語活動は、どの場面にも共通して見られた。「謝罪」を伴う言語活動は、文化的な問題と深く関係しており、タスク遂行の難易度はかなり高い言語活動であると言える。また、学習者が実際に遭遇している言語活動の多くは、問題やトラブルの解決を目的とした言語活動であった。こうした言語活動のタスクを遂行するためには、言語能力と共に文化的な背景や知識が必要不可欠であるが、JFL 環境の学習者は自然な日本語のやり取りに触れる機会が非常に少ないため、こうした言語活動を問題なく遂行することは、かなり困難であると思われる。そこで、学習者が自然な言語活動のやり取りに触れる機会を作ることが必要であると思われるが、JFL 環境においてそのような場面や状況を作り出すことは難しいため、例えば映像作品を教材として取り入れ、学習者が客観的に言語活動を観察し、文化的な情報についても学べるように活用するなど、文化的な背景に基づく言語行動の例を積極的に示すことも重要である。

## 注

- 1) 2010年3月から2012年2月にかけて、新羅大学校教養課程大学の外国語コースの中に設けられた日本語コースで、レベルは1から4まで開講されていた。初級クラスとは、レベル1(初級前半)とレベル2(初級後半)に当たるとする。
- 2) 授業で使用されていた主教材は新羅大学作成の『ニューライン日本語1』、『ニューライン日本語2』であった。

## 参考文献

- 来嶋洋美・柴原智代・八田直美(2012)「JF日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』独立行政法人国際交流基金
- 崔光準、李芬雨、武田勇記(2009)『ニューライン日本語1』ダラク院
- 崔光準、李芬雨、伊東真美、伊藤礼子(2009)『ニューライン日本語2』ダラク院
- 山内博之(2003)「言語活動の目録化と教材バンク作成の指針—ドイツVHSの学習者を例にして(多元性のある日本語教育教材研究及び作成—欧州広領域での使用を目指して)」『南山大学国際教育センター紀要』南山大学国際教育センター